

エレクトラの自己矛盾

大野 久美

I. はじめに

Eugene O'Neill の *Mourning Becomes Electra* (以下 *Electra* と略す) は、1931年10月26日、New York の Guild Theater で初演され、上演時間が5時間を優に越す長大作にも拘わらず、150回の公演を記録するという成功を収めたものである。Aeschylus の *Oresteia* 3部作の枠組みを模倣し、4幕からなる「帰郷」*Homecoming*、5幕から成る「追われる者たち」*The Hunted*、4幕5場から成る「憑かれた者たち」*The Haunted* の3部構成の作品である。主な登場人物は、男5人、女3人であり、第2部第4幕の船上場面以外は、すべて New England の小さな港町郊外の丘に佇むギリシア神殿風の館、Mannon 邸が舞台となっている。

O'Neill はこの作品を1926年頃に着想し、1929年になって書き始めた。つまり *Electra* は1920年代、旺盛な創作活動を究めた O'Neill の20年代の終着点とも言うべき作品である。*Electra* についてはこれまで様々な評価が成されているが、ここでもう一度、これらの評価の再吟味をする必要がある。なぜなら評価の再吟味をすることによって、この作品の本質を浮き彫りにすることができるからである。まず第一に、この作品がギリシアの演劇との極めて強い近似性をもっているという評価はよく知られており、これには O'Neill 自身も次の様に述べている。

O'Neill の「創作ノート」によると、「ギリシア的宿命観に近い心理学的な戯曲になり、しかもギリシア劇の神や超自然の応報に何の信仰も持たない現代知識人に理解され、感動を呼ぶ悲劇をつくること」¹⁾ とある。又、このノートの中で O'Neill はギリシア悲劇における「神の意志による人間の宿命」に対応して

‘psychological fate’ を当てていることを明らかにしている。Daris Alexander は「二つの観念即ちピューリタンの良心における宿命と、両親と子供の間関係における宿命の総合から O'Neill は ‘psychological fate’ を形づくった」²⁾ と論じている。O'Neill は ‘psychological fate’ を使うことによって O'Neill 独自の世界を創出したと言えよう。

しかし ‘psychological fate’ だけを使ってギリシア劇を現実には当てはめようとしても無理な点がある。人間性の悲劇一般としての演劇のみでは、その悲劇の具体的な様相や展開を明らかにすることはできない。そのため古代ギリシアの悲劇をめぐる個人、家族、社会その歴史的背景と近代的演劇の相違を解明することが、極めて必要なこととなるのである。

つまり、悲劇の歴史的な展開を縦軸にし、悲劇の一般性を横軸にして、その交差点上の家族の愛憎、葛藤、苦難、解決をめぐる争いを、外面的のみでなく内面的にも総体として把握しておく必要がある。

O'Neill の1920年代の集大成となる *Electra* は、単に精神分析学的方法だけを用いたのではなく、ユングの元型心理学³⁾ を駆使し、さらに、この心理学に影響を及ぼしたニーチェの「生命哲学」を活用し、ピューリタニズム的な自我から究極的には自己実現に至るまで広範囲の、いわゆる人間学的な領域に及んでいるのである。

ただ単にフロイトの影響のみに限定されているものでないことは、次の O'Neill の言葉からも明らかであろう。

「事実、私の場合、人間の存在と生命の推進力に対する本能とも言うべき心理分析の洞察力によって書かれたのであって、これはギリシア劇の時代から連綿として続いているものでありましょう。しかし実を言えば、私も現代の心理学をかなり勉強しましたから、今ではフロイトの理論にもかなり精通するようになりました。ですから、人物の性格を書き込んでいくうちに、いつの間にか幾人かの登場人物の行動にそれが付け加えられていったのです。そうは言っても、こういうことは、いつも後になってから思いつくことであって、何か心理学の影響を受けて作品を書こうなどと考えたことは一度もありませんでした。私に指針を与えてきたのは、私自身

の演劇的本能と個人的な人生体験だったのです。」⁴⁾と述べている。

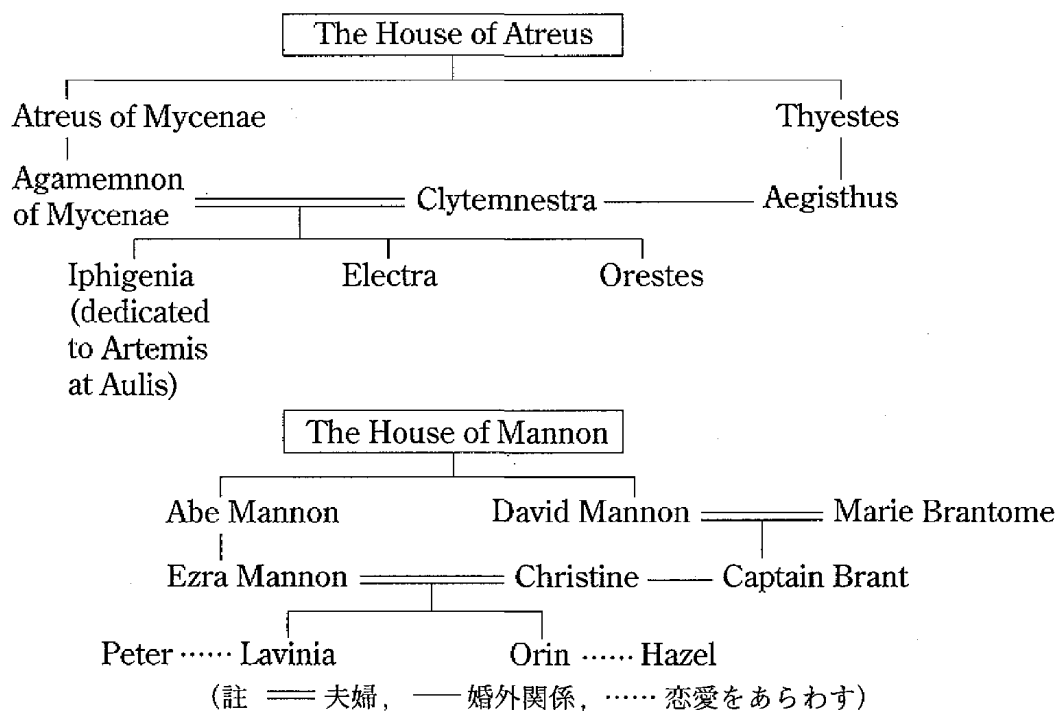
以上の認識のもとで、ギリシア演劇の近代化のみでなく、その歴史的な違いを明らかにして New England を背景にした Mannon 家を中心にし、Mannon 家の愛憎、葛藤、苦難、死と再生、老若男女、親子姉弟、夫婦の相互の憎悪と対立の意識的、無意識的な争いに焦点を当てて論じていきたい。

従って、縦軸（歴史的な違い）だけを強調しても不十分であるし、又、横軸（ギリシア悲劇）を現代にもってきて、機械的に、当てはめても十分ではない。

そこでこの交差点上の Mannon 家とそれを取り巻く周辺のコーラス（人々の集団）をも取り上げ、これらの社会、家族、個人をめぐる内部の矛盾を心理学的、悲劇的哲学性として捉え、演劇的集大成として O'Neill が挑戦しようとしたところに、この作品の重要性があると言えるのではないか。

II—i ギリシア劇とオニール劇の類似性

Electra はギリシア演劇の深い敬意と傾倒から生まれたものであると評価されている。確かにギリシア的な演劇を踏襲していることは随所に表われている。一例を



上げれば Aeschylus によって書かれた *Oresteia* 三部作の構成と O'Neill の *Electra* の構成の類似性にある。これはすでに示した Atreus 家と Mannon 家の系図を見れば理解できよう。

つまり、これを基軸にして O'Neill は *Electra* の中での三部作を構成したことは明白である。プロットの類似点ばかりでなく登場人物の呼び名でさえも原名の振りが感じられる。Ezra Mannon は Agamemnon の現代化であり、その発音に原名の臭いを感じることができる。同様に妻 Christine は Clytemnestra に、息子 Orin は Orestes に、各々似かよった発音を残している。

又、舞台装置などもギリシア劇的であることは見逃すことはできない。次に示す 1 部 1 幕のトガキからも明らかである。

Behind the driveway the white Grecian temple portico with its six tall columns extends across the stage.

The temple portico is like an incongruous white mask fixed on the house to hide its somber gray ugliness.

さらに登場人物らがいつも仮面のような様相を与えられていることもギリシア劇と酷似している。

O'Neill 自身も上演されたこの劇を見た後、彼自身が意図した詩情の欠如を嘆いて「作品の初稿ではギリシア劇にならって仮面の使用を予定したが、それでは、あまりにもギリシア劇の臭いが強過ぎて、現実の New England に舞台をおこうという自分の意志にそぐわず、周囲の事情もあって、仮面をやめて仮面のような顔で済ませることに変更したものだ。自分としては初めに考えていた古典的な解釈から切り離された、単なる心理分析的な芝居を舞台でみる今としては、仮面を使った *Electra* の上演をみたいものだと思う。仮面を使えば New England の家庭の話という現実を二義的な枠組みの中に収めて、劇中人物をその運命に追いやる死と生のドラマを、もっと強く表わすことができるだろう。」⁵⁾とも述べている。O'Neill は仮面を使用せず、仮面のような顔で済ませたことを後悔していたのである。まさに

仮面を使っていれば仮象の世界と現実の世界を明らかに分けることができたであろう。特に、主人公 Lavinia についてはフロイト的でもあり、ユング的でもあり、さらには、ニーチェ的な側面をもつ複雑な人物として描かれているのであるから、仮面を使ったらより理解しやすくなったという認識を O'Neill は持っていたに違いない。

次に O'Neill はギリシア劇で重要な役割を占めるコーラスの役割をこの作品の中に登場する Mannon 家を取り巻く町の人々に移し変えている。

山内邦臣氏は『ユージン・オニール研究』の中で「コーラスは‘一団の人’という意味とともに演劇としてのコーラス（合唱隊）との表裏二重の意味を与えられていると考えられるのが特色である。」⁶⁾と述べている。表面的にはその様に見られるかもしれないが、オニール劇の一団の人々＝町の人々は Mannon 家に対して、一方では、噂話をし、他方では畏敬の念をもっており、地域、集団の集合的無意識層を表わすもので二重の意味をもたないであろう。ただこれらの共通点は社会の一構成部分の一つの集団単位であり、この点についてはギリシアも1865年代の New England でも共通と言えるかもしれない。

このような社会の一構成部分の集団単位＝（一団の人々）は、集合的無意識層であり、これらの人々に取り巻かれる Mannon 家は個人の愛欲と憎悪、復讐と犯罪という悪業の循環による「人間の悲劇」を表わしている。この点においてはギリシア悲劇とある面では類似性があると言えよう。

II—ii ギリシア劇とオニール劇の相違性

ギリシア劇においては姦通の罪により、古代社会の掟に基づいた家系を維持させることが重要とされていた。O'Neill 劇の中にも、家系の維持はあったが、それはピューリタニズムによって支えられていたもので姦通の罪は、家系の維持より重要視されていた。特に、旧家族である Mannon 家はこの傾向が強かったと思われる。次の台詞は娘 Lavinia が母 Christine の姦通を責める場面である。

Lavinia: I asked the woman in the basement. He had hired the room under

another name, but she recognized his description. And yours too. She said you had come there often in the past year.

Christine: It was the first time I had ever been there. He insisted on my going. He said he had to talk to me about you. He wanted my help to approach your father —

Lavinia: How can you lie like that? How can you be so vile as to try to use me to hide your adultery?

Christine: Vinnie!

Lavinia: Your adultery, I said!

Christine: No!

Lavinia: Stop lying, I tell you! I went upstairs! I heard you telling him — “I love you, Adam” — and kissing him! with a cold bitter fury
You vile — ! You’re shameless and evil! Even if you are my mother, I say it!

(Homecoming · Act Two)

しかし、ここでギリシア劇と決定的な相違点は Mannon 家の一つの源流には、ピューリタンの掟とフロイト的な相剋があるということである。そしてさらに町の人々との愛憎の相剋が付け加えられている。

次に示す台詞にはその相剋がよく表われている。2部2幕で Christine が Lavinia から夫 Ezra 殺害を責められ、Christine は Orin を味方に引き入れようと必死で懇願する場面である。

Christine: She found some medicine I take to make me sleep, but she is so crazy I know she thinks — then, with real terror, clinging to him
Oh, Orin, I’m so afraid of her! God knows what she might do, in her state! She might even go to the police and — Don’t let her turn you against me! Remember you’re all I have to protect me! You are all I

have in the world, dear!

Orin: Turn me against you? She can't be so crazy as to try that! But listen. I honestly think you — You're a little hysterical, you know. That — about Father — is all such damned nonsense! And as for her going to the police — do you suppose I wouldn't prevent that — for a hundred reasons — the family's sake — my own sake and Vinnie's, too, as well as yours — even if I knew —

(The Hunted • Act Two)

さらに1部2幕で Christine が不貞を責められ、ピューリタンの掟に縛られている Lavinia を威す。

Lavinia: I won't tell him, provided you give up Brant and never see him again — and promise to be a dutiful wife to Father and make up for the wrong you've done him!

Christine: Suppose I refuse! Suppose I go off openly with Adam! Where will you and your father and the family name be after that scandal? And what if I were disgraced myself?

(Homecoming • Act Two)

これらの登場人物達の台詞からも理解できるようにつねに心の奥底にはピューリタンの要素が沈殿している。個人と家族に悲劇が起こるのは、ピューリタンの社会との相剋によってであり、この相剋を克服しようとする所に真の意味での近代化があると言える。

反対にピューリタンの掟を克服しようとした人物もいる。それは Mannon 家の当主 Ezra である。Ezra はピューリタンの道徳に囚われた愛のない夫婦生活を悟る、そして妻と共に真実の愛を求め再出発することを決意するのである。

Mannon: ...Before that life had only made me think of death!... That's always been the Mannons' way of thinking. They went to the white meeting-house on Sabbaths and meditated on death. Life was a dying.

Christine: What has this talk of death to do with me?

Mannon: ...But listen, me as your husband being killed that seemed queer and wrong — like something dying that had never lived. Then all the years we've been man and wife would rise up in my mind and I would try to look at them. But nothing was clear except that there'd always been some barrier between us — a wall hiding us from each other!... I came home to surrender to you — what's inside me. I love you... You'll find I have changed, Christine. I'm sick of death! I want life! Maybe you could love me now!

(Homecoming · Act Three)

しかし、Ezra はなぜ死ななければならなかったのか。彼自身、死をもって償わねばならぬ程の罪を犯してはいない。むしろ町の人々が称える様に「町の善行の原動力」とも云うべき高潔な人柄である。結局、ピューリタンの道徳に囚われた Mannon 家の運命から脱出できなかったのである。Ezra の存在は「真の意味の悲劇の人物」であると言えるのではないだろうか。

Ⅲ. *Mourning Becomes Electra* における精神分析の過大評価の再吟味

Electra における精神分析学が偉大な影響を及ぼしているという評価は至る所に見られる⁷⁾。特に、フロイトの分析に焦点が絞られ、フロイトの Oedipus Complex, Electra Complex が Mannon 家の親子、姉弟の心理に明確に表われている。例えば、1部2幕で Lavinia が母 Christine に New York で Adam Brant と密会している現場を確かめたと言うと、Christine も遂に隠しきれずに、それを認めてしまう。Christine は結婚前は Ezra を愛していたが、結婚初夜から、その愛は嫌悪に変わり、以来憎みつつ、夫に身体を与えたに過ぎないと告白し、Lavinia は次の様

に言い返している。

Lavinia: So I was born of your disgust! I've always guessed that, Mother — ever since I was little — when I used to come to you — with love — but you would always push me away! I've felt it ever since I can remember — your disgust! then with a flare-up of bitter hatred
Oh, I hate you! It's only right I should hate you!

これに対し Christine は、次の様に反論する。

Christine: I know you, Vinnie! I've watched you ever since you were little, trying to do exactly what you're doing now! You've tried to become the wife of your father and the mother of Orin! You've always schemed to steal my place!

(Homecoming · Act Two)

この台詞は Lavinia の Electra Complex の指摘が母 Christine によってなされている個所である。

Christine は夫 Ezra に対して全く愛情を示さず、情夫 Brant と共謀して夫を殺害するが、息子 Orin に対する愛情故に絶えず後髪を引かれる思いをし、もし Orin さえ父と共に出征することがなければ Brant との関係は恐らく起こり得なかっただろうと娘 Lavinia に告白している。

Christine: ...And most of the time I was carrying him, your father was with the army in Mexico. I had forgotten him. And when Orin was born he seemed my child, only mine, and I loved him for that!... Well, I hope you realize I never would have fallen in love with Adam if I'd had Orin with me.

(Homecoming · Act Two)

さらに次の台詞には Lavinia の Electra Complex が読み取れる。ここでは Lavinia が弟 Orin を操り、黒い喪服を纏い、母を監視し、母の道ならぬ恋を罪とし、父殺しの復讐を誓うのである。

Lavinia: ...You and I, who are innocent, would suffer a worse punishment than the guilty — for we'd have to live on! It would mean that Father's memory and that of all the honorable Mannon dead would be dragged through the horror of a murder trial! But I'd rather suffer that than let the murder of our father go unpunished!... And Father knew she'd poisoned him! He said to me, "She's guilty!"

(The Hunted · Act Three)

Lavinia は母を愛し、姉の言葉を信じようとしなかった弟 Orin の嫉妬心を操って、母の恋人 Brant を殺させた。そして母に向かって決定的な言葉を浴びせるのである。

Lavinia: He paid the just penalty for his crime. You know it was justice. It was the only way true justice could be done. Mother! What are you going to do? You can live!

(The Hunted · Act Five)

娘 Lavinia の追求に Christine は、耐えられず、ピストル自殺を遂げるのである。その自殺にさえも「それが正義よ」と言い切るのである。まさにこれは社会的正義という外部的な要因ではなく内面的動機、つまり Electra Complex の表われである。

Orin にも母 Christine に対する Oedipus Complex を指摘している箇所がある。

Orin がよく「南海の島」について語る部分に見られるが、次の台詞にその特質が表われている。

Orin: ...I only felt you all around me. The breaking of the waves was your voice.
The sky was the same color as your eyes. The warm sand was like your
skin. The whole island was you.

さらに続けて次の様に告白する。

Orin: And I'll never leave you again now. I don't want Hazel or anyone.
with a tender grin
You're my only girl!

(The Hunted · Act Two)

この Orin の台詞はフロイトの精神分析学的な重要な特質を示している。つまり禁欲により性欲が別の形をとって表われるのである。Orin が語る「南海の島」—死もなければ、来世もなく、罪もなければ憎しみもないという平和な桃源郷—を夢み、それに憧れている Orin にとっては、島の水や空、砂浜が愛する母の肉体として想像される⁸⁾。

これらの視点からみるとフロイト的精神分析要素が *Electra* には充満しており、フロイトの影響力が大きいとみられるのはある程度納得できる。

さらに重要視しなければならないのは、Oedipus Complex, Electra Complex だけではなく、フロイトの個人的意識と、個人的無意識の対立と、その相剋を克服しようとするピューリタンの自我が取り上げられていることである。その点が強調されている台詞は次の Christine の言葉によく表われている。

Christine: So hadn't you better leave Orin out of it? You can't get him to go
to the police for you. Even if you convinced him I poisoned your

father, you couldn't! He doesn't want — any more than you do, or your father, or any of the Mannon dead — such a public disgrace as a murder trial would be! For it would all come out! Everything! Who Adam is and my adultery and your knowledge of it — and your love for Adam!

(The Hunted · Act Two)

Peter と結婚しようとする Lavinia に嫉妬を向ける弟 Orin は、Lavinia が島の男達と親密になっていたことを話す。これは今まで母に対して向けていた Oedipus Complex を姉にも抱いている Orin の気持ちが表われている所である。

Peter: You stopped at the Islands?

Orin: ...I guess I'm too much of a Mannon, after all, to turn into a pagan. But you should have seen Vinnie with the men — !

Lavinia: Orin! Don't be disgusting!

Orin: Picture, if you can, the feelings of the God-fearing Mannon dead at that spectacle!

(The Haunted · Act One Scene Two)

しかし Orin の心の中には嫉妬に燃える Oedipus Complex 的心情だけでなく、Mannon 家の先祖を登場させることでピューリタンの自我を正当化しようとしていることが明らかである。さらに Orin の心に存在するピューリタンの自我が強く表われている箇所がある。姉 Lavinia が母にそっくりになってきたと言いながら、Mannon 家の先祖を登場させるのである。

Orin: I mean the change in your soul, too. I've watched it ever since we sailed for the East. Little by little it grew like Mother's soul — as if you were stealing hers — as if her death had set you free — to become her!

Lavinia: Now don't begin talking nonsense again, please!

Orin: Don't you believe in souls any more? I think you will after we've lived in this house awhile! The Mannon dead will convert you.

he turns to the portraits mockingly

Ask them if I'm not right!

(The Haunted · Act One Scene Two)

次の台詞もピューリタンの自我が強調される個所である。Orin が母を自殺に追いやった自分自身を責めながら、Lavinia に反抗的に言っている。

Orin: ...But she wasn't! She isn't anywhere. It's only they —

he points to the portraits

They're everywhere! But she's gone forever. She'll never forgive me now!

Lavinia: Orin! Will you be quiet!

Orin: Well, let her go! What is she to me? I'm not her son any more! I'm Father's! I'm a Mannon! And they'll welcome me home!

(The Haunted · Act One Scene Two)

次に作品に見られるユング的な捉え方を明確にしておきたい。それは次の台詞が最適であろう。父 Ezra が帰還し、Ezra は Christine と二人きりになる。Adam の出現の噂に心穏やかではないが、彼は Christine との結婚生活をやり直したいと思い、過去を反省し、孤独から脱却したいと切なる告白をする。嫉妬に燃える Lavinia は Christine の不実を父 Ezra に伝えきれず、寝室の鎧戸を見上げながら歯痒い思いをする。

Lavinia: I hate you! You steal even Father's love from me again!

You stole all love from me when I was born!

then almost with a sob, hiding her face in her hands

Oh, Mother! Why have you done this to me? What harm had I done you?

(Homecoming · Act Three)

Lavinia の母性愛への憧れが強ければ強い程、反作用的に母に対する憎悪が激しくなる。この Lavinia の台詞にユングの元型心理学の両面価値性が見事に表われている。

又同様に両面価値性は Mannon 家とそれを取り巻くコーラスとの関係にも成り立つ。ピューリタンの自意識の Mannon 家の人々と集合的無意識を表わすコーラス（人々の集団）は、各々が対立し、噂話をしている様にみえるが、他方、コーラスの人々は、いつも Mannon 家の人々を畏敬の念をもって眺めている。特に Mannon 家に長年仕えている Seth という庭師の台詞からもそれは伺えるのである。

Seth, Amos Ames, その妻 Louisa , Louisa の従姉 Minnie などが町の人々のコーラスの役割をする。ただし Seth 以外は金持ちで排他的な Mannon 家の様子を探ろうとしている。Seth は自慢気に Mannon 家のことを話す。

Seth: ...He learned law on the side and got made a judge. Went in fur politics and got 'lected mayor. He was mayor when this war broke out but he resigned to once and jined the army again. And now he's riz to be General. Oh, he's able, Ezra is!

Ames: Ayeh. This town's real proud of Ezra.

Seth: ...Wal, I've got to see Vinnie... And if Ezra's wife starts to run you off fur trespassin', you tell her I got permission from Vinnie to show you round.

Louisa: Seth is so proud of his durned old Mannons!

(Homecoming · Act One)

そして、いつも Seth は Lavinia を見守っている。最終幕でも Seth は Lavinia

の側を最後まで離れず、淋しい『シェナンドーア』の船唄を歌うのである。

次にユング流の life cycle⁹⁾も Mannon 家に表われている。つまり Mannon 家の悪業の循環としてとらえられている。具体的に述べると Mannon 家の家系を遡れば、Ezra の父の弟 David の自殺に始まり、Christine と情夫 Adam Brant による夫 Ezra の殺害、息子 Orin と娘 Lavinia との共謀による Adam Brant の殺害、Christine の自殺、Orin の自殺という悪循環を成している。

しかしこれはそれぞれの根底にあるニーチェ的永劫回帰¹⁰⁾（永遠の生命）の表われでもある。又同時にこの life cycle の表われの中で Lavinia が Christine に自らを転移し、Orin が父に自らを転移したが Orin は自己実現ができず自殺するという否定的な結果となる。舞台に登場する Mannon 家の人々 Ezra, Christine, Adam, Orin は、次々と死んで行くのである。しかし最後に一人残された Lavinia の生は、何を表わしているのであろうか。Lavinia はディオニュソスの発言で奥の深い生命の意志＝権力の意志¹¹⁾を表わし、独創的、自己克服的、価値創造的なものを表現している。これは、ニーチェの特徴でもあると言える。しかし、結果的には自己閉鎖に陥ったのは Negative な自己実現しかできなかったからだと言えよう。

Lavinia が母と対立しながら転移して Lavinia Christine になり、Orin は Ezra に対立しながら Orin Ezra となる。つまり、対立、転移しながら一体化しているということである。又これは仮面をつけないで一体化しているということになる。O'Neill は今まで作品の中で、仮面、独白によって個人的意識と個人的無意識、個人的意識と集合的無意識の矛盾を表わそうとしていた。

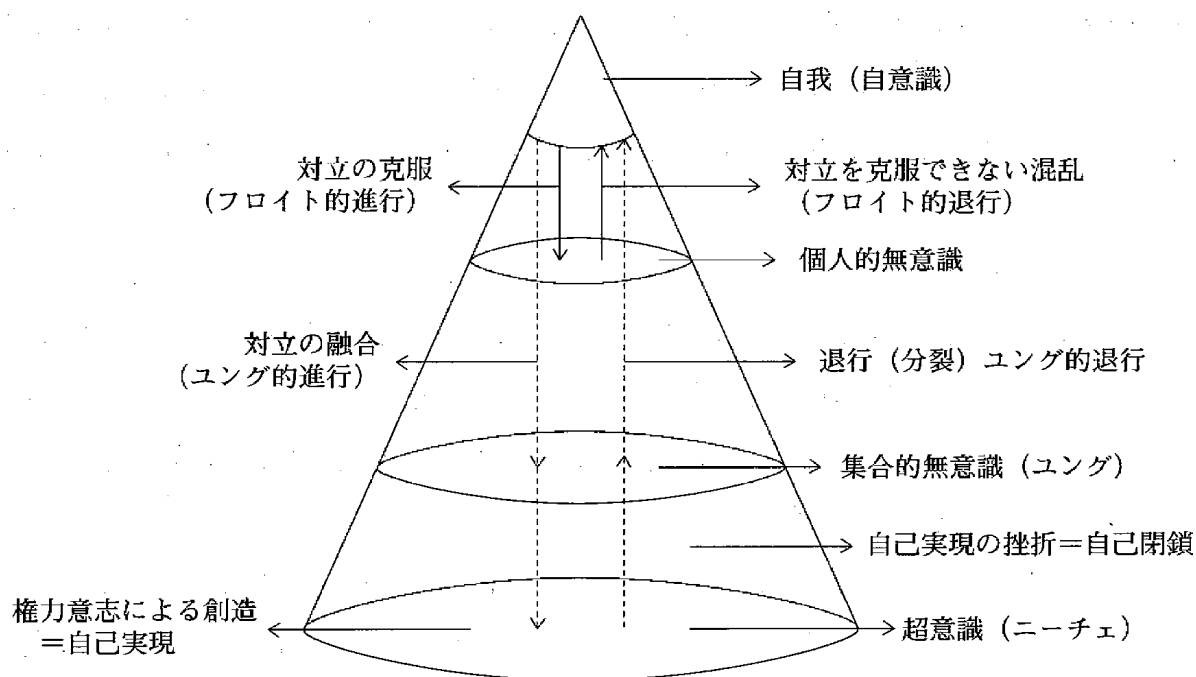
しかしここでは集合的無意識や永劫回帰を仮面に表わせない潜在的仮面として表わそうとしたのである。具体的に言えば、仮象（仮面）を水面に浮かんでいる泡とすると、本質の永劫回帰は水面下の底流のようなものであり、二つは対立するだけでなく、水面に浮かんでいる泡も底流から現われたものであるから、これが「真実の仮象」ということになる。言わば、この二つの側面は「仮面の二重性」となるのである。これは1926年に発表された *The Great God Brown* に見られる Dion と Brown が対立しながら、Dion Brown として一体化することと同じである。これ

はニーチェの「悲劇の誕生」の表われでもある。「悲劇の誕生」においては、もはや「仮象（仮面）の芸術」（アポロン）ではなく、「悲劇的な芸術」（ディオニュソス）がその賛美の形式となったと述べている。つまり「仮面の芸術」（アポロン）は完全に悲劇的な芸術（ディオニュソス）に吸収され、アポロンとディオニュソスは対立から互いに結びつくのである¹²⁾。

そこで *Electra* は *The Great God Brown* の延長線上にあると言える。つまり *Electra* はギリシア悲劇を現代化しただけではなく、ニーチェの「悲劇の誕生」を取り入れた悲劇と言えるのではないだろうか。

次に示す図は本論で述べてきたフロイト的、ユング的、ニーチェ的側面を可能な限り図式化したものである。

『喪服の似合うエレクトラ』の仮面の重層構造を基礎づけた
三大学説の整理体系化



結論

この作品は今まで述べた通り O'Neill の作品の集大成という意味合いが込められている。又 *Strange Interlude*, *Dynamo* の作品なども本作品に与える影響が潜在していたことは言うまでもない。

特に、*Dynamo* が及ぼした影響力には偉大なものがある。*Dynamo* において O'Neill は「科学と機械の神」に変わる新しい神を見い出そうと苦悩した。O'Neill は 'the Real God' を中心にしてそれぞれの神を統括しようとしたのである。しかし O'Neill 自身の中にある「ピューリタニズムの神」「機械の神」「フロイト的、ユング的側面の相剋によって投影されたダイナモ神」の枠から脱却することはできなかった。そのことを主人公 Reuben の姿を通して示そうとしたのである。O'Neill は二次元演劇（舞台と観客）の中でこの複雑な人間の様々な側面を四つの神々を通して具現化しようとした。三次元演劇つまり virtual 演劇でしか表現できないものを二次元演劇で表わそうとしたことに演劇表現技術の限界があったのである。そこで O'Neill は *Dynamo* で現実捉えようとした「科学と機械の神」を Mannon 家に流れている遺伝子に置き換えて考えようとしたのであろう。この遺伝子の働きによってコピー人間が作り出されていることは、Mannon 家の life cycle の悪循環をみれば明白なことであろう。

O'Neill は「心理学的決定論」の延長線上の「遺伝子決定論」の動きについて、何らかのインスピレーションをもっていたと見られる。Mannon 家の「悪の循環」は先に明らかにした様に、精神分析学や深層心理学で、ある程度明らかにされたが、さらに遺伝子の作用を考えたときより一層、明確になるであろう。

つまり、Mannon 家の各個人は単に遺伝子やその心理によっても踊らされているだけでなく、それぞれの個性によっても動かされているのであり、その個性を決定しているのは免疫であり、免疫の独自性¹³⁾なのである。

従って、免疫のもつ個性はこの作品の各人特に Lavinia に独特なニュアンスを与えている。それゆえ、心理的な分析は一局面にすぎず、遺伝子や免疫のもつ生命の特性が重要な働きをしていることは各所に明らかなことと思える。

さらに主人公 Lavinia は Mannon 家の life cycle の中で自己実現を完全に成し遂げず、自己幽閉、自己閉鎖として Negative な作用に終わったのはピューリタンの自我と、ニーチェ的な権力意志の自己矛盾を表現したものであることに間違いはないと言えるだろう。

NOTES

- 1) Eugene O'Neill, *Working Notes and Extracts from A Fragmentary Work Diary*, (European Theories of the Drama, ed. by B. H. Clark, New York: Crown Publishers, 1954, pp.530 ~ 536) この「創作ノート」は作者自身が *Mourning Becomes Electra* の構想と製作過程について記録したものである。
- 2) Doris Alexander, *Psychological Fate in Mourning Becomes Electra*, PMLA (Vol. LXVIII, No.5, Dec., 1953), p.924
- 3) C. G. Jung, *The Collected Works of C. G. Jung, Vol.XI, Psychology and Religion* ed. Herbert Read et al. (New York: Princeton University Press, 1958), p.345
- 4) マーサ・キャロラインに宛てた手紙 (1929年10月13日付)
- 5) Arthur and Barbara Gelb, *O'Neill* (New York: Harper & Row, Publishers, 1973), pp.755~6
- 6) 山内邦臣, 『ユージン・オニール研究』 山口書店, 1964, P.182
- 7) Virgil Geddes: *The Melodramadness of Eugene O'Neill* (The Bookfield Players, Inc., 1934), pp.30~35
Doris M. Alexander, *Psychological Fate in Mourning Becomes Electra*, PMLA (Vol. LXVIII, Dec., 1953), pp.923~34
- 8) Eugene O'Neill, *Working Notes*, quoted in Doris V Falk, *Eugene O'Neill And The Tragic Tension* (New Jersey: Rutgers Univ.Press, 1958), p.131
- 9) C. G. Jung, *The Collected Works of C. G. Jung, Vol.XIII, Alchemical Studies*, ed. Herbert Read et al. pp.21~28
- 10) Georg Picht, *Nietzsche* (Germany: Klett-Cotta, 1988), p.256
- 11) 矢島羊吉, 『ニーチェの哲学—ニヒリズムの論理』 福村出版株式会社, 1986, p.119
- 12) Georg Picht, op. cit., p.256
- 13) 多田富雄『生命の意味論』新潮社, 1997, pp.24~25

本文中の引用は、すべて Eugene O'Neill: *Mourning Becomes Electra* (Kyoto: Rinsen Book Co., 1976) *The Plays of Eugene O'Neill Vol. II*, によるものである。

この論文は1999年10月2日、日本演劇学会秋季大会での口頭発表に加筆、修正したものである。